「都市型共同墓所」の構築と地縁・血縁を超える墓地の方向

横 村 久 子*

The Construction of "The New Cemetery of City Type" and the Direction of the Cemetery Exceeding the Territorial Society & the Relationship

Hisako MAKIMURA

摘要：地縁血縁の中で成立、維持されてきた墓地が近代化の中で崩壊してきた。これまでの墓地が固定的な地域共同体により支えられていたなら、その崩壊後にはどのような墓地が出現してくるのか。その墓地は何を要素として成立しているのか。近年新たな形で出現している都市型共同墓所を調査することで、地縁血縁を超える墓地の方向を探る。都市型共同墓所とは家族を単位とせず、地縁血縁によらずに同じ墓所に眠る形をそう呼ぶこととする。分析の結果、共同墓所に共通にあるのは個人単位、共同祭祀、死後の平等の3点。今後の方向として墓所の共同化、有期限化、無形化が導き出された。それは近代化の矛盾の課題に対応し、近代を超える萌芽と見られる。

はじめに—都市型共同墓所の構築

血縁、地縁の中で成立、維持されてきた墓地が崩壊していくことがわかってきた。これまでの墓地が、地縁、血縁による固定的な村落共同体によりつくられ、支えられていたなら、では、その崩壊後には、どのような墓地が出現してくるのだろうか。その墓地は何を要素(理由)として、墓地の共同性をもてるのか。近年、新たな形で出現している都市型共同墓所と、これまでも見られた共同墓所を調べることににより、共同墓所を成立させている要因は何かを探ってみる。ここでいう「都市型共同墓所」とは、墓所を家族単位とせず、血縁、地縁によらずに同じ墓所に眠っている墓のかたちを筆者がそう呼ぶことにする。

対象地の選定については全国でまだ類例が少ない中から、成立年代、地域、構成員の同質性の程度の違いなどから、①大阪北生活協同組合霊園(大阪府箕面市)②京セラ企業墓(京都府八幡市)③女の碑・志縁廟(京都市)④安隠廟(新潟県巻町)⑤一心寺お骨仏(大阪市)⑥もやいの碑(東京都豊島区)⑦老人ホーム新生苑・納骨堂(大阪府松原市)の7カ所を選び、次の項目を調査した。成立年代では最も古いものとして⑤、最も新しいものとして⑥、地域では大都市部として⑤⑥⑦、大都市郊外として①、過疎地域として④、また構成員では②③を選定した。設立された企図と経過、そして都市型共同墓所の現状として、1共同墓所在地・事務局所在地・周囲の環境条件 2設置主体 3維持・管理・運営 4設置年月日 5会員の資格・条件 6共同墓の形態 7遺骨等の埋蔵の方法 8祭祀 9宗派 10遺骨埋蔵に関する規

則(規約、細則、契約条件) 11費用(永代使用料、管理料等)12規模(区画数、総面積) 13墓碑銘 14使用権の継承 15利用者の人数・会員の属性を聞いた。

1 都市型共同墓所を成立させるもの

1) 7つの都市型共同墓所の特性

7つの新しい都市型共同墓所(共同墓地)を調査すると、①個人単位が可能である ②共同祭祀があること ③活動組織のエリアで、広域的であること ④先祖より子孫、過去より未来へ意識が向いていること ⑤自ら選択の意思があること ⑥生前からの人間関係、コミュニケーションづくりがあること ⑦墓所ではすべての人が同等の扱いであること ⑧定着性がある、の8項目の特性があげられる。これらの共同墓所の特性について、すべてに共通する性格をもう少し詳しく比較、検討することで抽出してみよう。

(1) 個人単位が可能である点について、7カ所すべてが個人単位での墓所、納骨ができる。ただ、生協霊園はロッカー1つが家族墓所として使用されている場合が多く、安隠廟も共同墓の側面の1つのカロート(納骨室)は、家族墓所としても使用されている場合もある。女の碑¹⁾²⁾、もやいの碑³⁾、一心寺・骨仏、京セラ従業員の墓、老人ホーム・慰霊堂が全く個人単位であり、安隠廟と生協霊園は、個人性と家族性を備えている。

(2) 共同祭祀については、やはり7カ所すべてが行っている。生協霊園、女の碑、京セラ従業員の墓、もやいの碑はそれぞれ、組合員、碑の会会員、従業員と遺族、もやいの会会員という仲間だけで例祭や慰霊祭が行われ

*奈良文化女子短期大学

ている。家族墓所の性格をもつ、生協霊園や安隠廟は家族による祭祀もある。

それに対し、一心寺の骨仏は阿弥陀如来として毎日多くの納骨者により祭祀されているし、安隠廟は妙光寺のある地域の人とも交えて安隠廟法要がされている⁴⁾。

家族による祭祀、仲間（組織員）による祭祀、家族や組織員を超えた祭祀の三つの層があり、重複している所もあるが、家族だけの祭祀によらない点で共通している。

(3) 広域の利用については、利用者は主に共同墓所のある都市圏に居住している。しかし、もやいの碑や一心寺・骨仏は約30%が圏外、安隠廟は6割が新潟県に無縁の人である。女の碑は会員が全国組織であり、京セラ従業員の墓は支社が全国にあるため、社員も全国からで、組織のエリアが墓地の利用圏域になる。また活動組織でないものは、本人が意思すれば利用できるという、広域性をもっている。

(4) 過去より未来に意識が向けられている点では、女の碑は、女性が一人生きてきて、死後の安住の住み家やその思いを託する碑に、生の安らぎを期待している。共同墓所があることにより、現在の生活に安らぎと自由に生きる可能性をもたられているという、未来から逆照射されている。京セラ従業員の墓も、物故者の霊を供養するためもあるが、企業墓により、社員の心の依り所にして、現業に励んでほしいという期待がある。安隠廟は無縁の可能性への安心感と同時に、寺としては、過疎地の寺自体としての活性化と崩壊するコミュニティの再生という未来への志向が強い。もやいの碑は、大都市の個人化する多様な人たちの死後処理の安心感とコミュニティづくりをめざす点で未来へ比重がある。しかし、老人ホーム納骨堂、骨仏には未来への意識はない。

(5) 共同墓所を自ら選択した意思がある点については、女の碑、もやいの碑は全員が個人の意志によりその共同墓所に納骨されることが実現する。それは家族や継承者がいないか、それを期待していないかである。

京セラ従業員墓も、故人の意思によっているが、家族が希望しない場合は本人の意思は果たされない。生協霊園、安隠廟も家族がいる場合は同様の現象が起きる。反対に、一心寺・骨仏には、家族の一員として家族墓所に納骨されることを本人が望んでいるが、法律的な家族関係でないために、一人納骨される場合が多い。これも本人の意思によらない。

7カ所とも個人の意思の選択の可能性が高いが、家族性を有している所、また老人ホーム慰霊堂、一心寺骨仏のような無名性の高い所は本人の意思による選択は弱い。

(6) 生前からの人間関係やコミュニケーションづくりがある点も差異がある。女の碑、生協霊園は、長年の組織活動の中から共同墓所が発生した。京セラ従業員墓は長年の企業活動の中でそれがある。もやいの碑と安隠廟

は、共同墓所の選択時には、人間関係もコミュニケーションもない人たちが寄っているが、むしろ共同墓所に入ることを選択した時点を出発にして人間関係づくりが始まっている。ところが、一心寺・骨仏は生前も納骨後も、納骨された人々の人間関係やコミュニケーションは全くない。全く個々バラバラに納骨され、関係性をもたない、無名性の世界にある。

(7) 墓所での扱いの同等性については、7カ所ともすべて納骨された人は平等である。生協霊園は、すべて同じ大きさのロッカーの上段、下段の区別もない。京セラ墓、女の碑、もやいの碑も納骨されて順次並べられるだけである。一心寺・骨仏は数10万の遺骨が合体して一体の阿弥陀如来に成形されるので、個人の平等を越えてしまう。7カ所全てが、空間的位置や規模、供養の差別を受けない⁵⁾。

(8) 定着性がある点については、すべての共同墓が共同祭祀をもっていて、墓地の継承者がいない、また継承者の移動によって墓地も移動するというのではない。当初からそうならないための選択をして、共同墓所を利用しているからである。老人ホーム慰霊堂だけは、10年間の安置の後阿倍野墓地に納骨する点で、定着性は他と異なる。

2) 都市型共同墓所を成立させている要因の共通性と差異性

このように、共同墓所を成立させる共通性を検討してみると、必ず備えている性格と、比重の異なる性格、共通性のないものがある。すべての共同墓所に同じ比重で必ず備えている性格は、①共同祭祀がある ②個人単位が可能 ③死後の平等の扱いの3点、また比重が異なるが④個人の選択の意思が抽出されてくる。

それでは次に、7ヶ所の共同墓所の差異性を検討してみる。前項の共同祭祀と個人単位という2つの共通性の軸で比較してみよう。共同祭祀—家族祭祀、(被葬者の)同質性—異質性の両軸で測ると、それぞれの共同墓所は図-1のようになる。

(1) 同質性と異質性

同質性が高いのは、生協霊園(組合員)、京セラ従業員墓(社員)、女の碑(会員)、老人ホーム納骨堂(入所者)である。それぞれ、長年にわたる組織の一員として生活してきた人たちが葬られている。家族や地域のゲマインシャフト的な共同体、血縁や地縁を離れた個人であっても、生協は1つの地域活動、京セラ企業墓は職業、女の碑は独身女性という性によっている。新しい言葉を用いるなら、「血縁」「地縁」でなく「活動縁」「社縁」「女縁」とも呼べる人間関係の中から出てきた。

一方、異質性が高いのは、安隠廟、もやいの碑、一心寺・骨仏である。この3カ所に葬られているのは、個人

図－1 都市型共同墓所の共通性と差異性のモデル図

凡例：一心寺・骨仏は埋葬者の属性は全く異質で共同祭祀ししないの IV象限

同士の共通項がほとんどなく、バラバラである。

安隠廟は、家族形態の多様な人たちが個々申し込んでいることと同時に、新潟という土地に全く縁のなかった人たちが6割もいる。もやいの碑は、「性、門地、財産、職業、人種、民族を越えて生前および死後の世界において有縁に」と属性をすべて問わない。一心寺・骨仏も、もやいの碑と同様である。

(2) 共同祭祀と家族祭祀

次に、共同祭祀－家族祭祀の軸からみよう。共同祭祀性が一番強いのは、一心寺・骨仏である。骨仏は、会員組織も持たず、しかも日常的に阿彌陀如来として一般の人からも祀られている。もやいの碑と女の碑は年に1～2回、会員だけによる合同慰霊祭だけがある。しかし、京セラ従業員墓は社員と遺族による合同慰霊祭で、しかも分骨されているので、それぞれの家族は自分の家族墓所をも祭祀している。共同祭祀と家族祭祀の中間形態である。安隠廟と生協霊園はカロートが個々あり、家族墓所として使用している人も多く、家族祭祀性が一番強い。家族祭祀と共同祭祀の併存形態である。しかし、安隠廟は中央に無縁になった時点の共同納骨室を備えており、生協霊園より共同祭祀性が強い。家族祭祀性が強いものから、共同祭祀性の強いものへの段階は、生協霊園→安隠廟→京セラ従業員墓→女の碑/もやいの碑→老人ホーム納骨堂→一心寺・骨仏、の順である。

図－1でみたように、家族祭祀が行われているものは、墓碑に家族の姓や被葬者の戒名が記されていて、記名性をもっている。一方、共同祭祀性の強いものは、共同の墓標板に名が順次彫られていたり、全くないものもある。つまり、家族祭祀性－共同祭祀性の軸は、記名性－無名性の軸ともいえる。

それぞれの個人は多面的な属性をもっている。性別、

年齢別、職業、親族としての位置、出身地、人種、門地、経済的地位、信条、宗教など、これまでこれらの枠組みの中で、閉じられていた生活から解放されて、自由な個人として生きれる可能性を得た。それらの拘束から放たれると同時に、それらのもつ保障性から切り離されて、ムキだしの個人、浮遊する個人となる。地縁、血縁を離れて、都市に集まって来た人たちは、そのような人たちで、すべて属性を離れて一個人として葬られる所が、大都市の東京でもやいの碑、大阪で一心寺・骨仏となったのは象徴的である。

3) 墓地の近代化を超える萌芽

日本の近代化による墓地の変容と取り残しによる矛盾の中で現れてきた、墓地の流動化、無縁化、個人化のもつ課題に対する萌芽として、都市型共同墓所を検討してきた。それらの共同墓所を成立させる特性は、①個人単位が可能である ②共通祭祀がある ③広域的である ④意識が過去より未来に向いている ⑤選択の意思がある ⑥生前からのコミュニケーションがある ⑦同等の扱いである ⑧定着性、が抽出された。この中で、個人単位が可能、共同祭祀がある、死後の扱い平等、選択の意思が共通の性格として導き出されたが、中でも個人単位であることは他の共通性格を導き共同墓所たらしめている根幹であるとする。家＝家族祭祀から離れ個人化したことで死後の平等と共同祭祀が可能になり、そして家族や地域の社会的属性による位置を超えて選択の意思が可能になったといえる。

これらのような、近年新しく出現した共同墓所がどのような特質を持っているかを鮮明にするために、明治以降の旧来の共同墓所と比べてみる必要がある。そこで、地縁、血縁をはずれ、①個人単位であり ②共同祭祀がある、という都市型共同墓所と同じような特性をもつ共同墓所であるものを取り上げた。西南の役・薩摩の戦死者の墓地である「南州墓地」と、官軍の戦死者の墓地である「官修墳墓」(現在、「西南の役官軍戦没者慰霊塔」、また「沖縄・陸軍病院第三外科職員の碑」、「満州開拓団物故者の碑」、「流行性感冒物故者の碑」である。

これらの共同墓所(共同墓地)は、地縁、血縁をはずれてはいるが葬られている人の同質性が大変高い。しかも、死を同じくしたという「死の共有」に依って共同墓所(共同墓地)が設けられたものである。死を共有する、死の共同性という意味は天寿を全うして人生を終えたり、日常生活の中の一般的な死ではないことを意味する。西南の役でやむなく敵、味方に別れて戦って死んだ、第二次世界大戦中、日本の沖縄決戦で陸軍病院の第三外科で勤務中に爆撃で一挙に死んだ、あるいは、満州開拓団として渡った人たちが、その困難のさ中に志半ばで死んだ。また、一時に数万人の死者を出した流行性感冒で

死亡したなど、ある理由で一時に多くの死者を出したことを悼む記念碑でもある。つまり、自ら、あるいは家族が選択したのではなく、他人によって建てられたものであった。また一人ひとり、個人の生き方によって迎えた人生の終焉ではなく、そこには個人の選択、意思を超えた生と死があったといえる。

これらと対照的に近年出現した、新しい都市型共同墓所（共同墓地）の特質は、まさにここにある。個人の人生、生き方の最終の選択、自己決定の結果として人生の終末の空間として、共同墓所が用意され選択されている点である。

2 共同墓所の有期限化・異質化・無形化

7カ所の都市型共同墓の出現と成立する要素をみると、墓所の共同化の中に、無形化と有期限化という要素が内包されていることがわかる。

安隠廟は、個人墓所のカロートに納骨されるが無縁になった時点から17年間寺で供養された後、共同墓所の中央の多宝塔下の中央納骨室（4つの壙）に撒骨される。女の碑の共同納骨堂も、棚に骨つぼが安置された後、堂の地下の4つの壙に「撒骨」される。撒骨、つまり、骨つぼから放たれて自然に回帰させられ無形状態となる。これを墓所の「無形化」と呼ぶことにする。

一心寺・骨仏は納骨当初から無形化されるのを前提としているが、焼骨の自然回帰される方法をとらず、阿弥陀如来という仏像の形として異質のものとなる。これを墓所の「異質化」と呼ぶこととする。

もやいの碑は、碑の下に地下納骨堂が満たされた段階で密封され塚となる予定である。もやいの碑は、巣鴨霊園、生協霊園は箕面墓地公園の一角にあるが、その他の共同墓所は寺院境内地にある。女の碑は常寂光寺、安隠廟は妙光寺、骨仏は一心寺、京セラ従業員の墓は円福寺である。

それぞれの寺は何百年もの長い法灯をもっており、境内地の共同墓所は納められた焼骨が有期限の中で合葬さ

れる。これを「有期限化」と呼ぶこととする。つまり墓所が集団化される中で、共同祭祀が行われることで無縁にならずに有縁化され、寺院に定着化される。個人の墓所の継承者の有無や継承者の移動に関係なく、無縁になり撤去や改葬されて流動することなく「定着化」されることになる。そして、その墓所は他の人に利用され、循環利用されることになる。

もやいの会では、死後は遺骨の引き取りや納骨を会に依頼することができる。生前からの会への参加によって、会員同志が協力して会まで届けることが望まれているが、できない場合もある。「遺骨引き取り証書」を会で発行し、他人にもすぐ分かるようにしている。

このように、都市型共同墓所の成立する要素の中に、「異質化」「有期限化」「無形化」という要素が内包されていることが分かる。個人単位、共同祭祀、死後の平等、そして選択の意思は共同墓所を成立させる墓所のソフト面の要素であり、異質化、有期限化、無形化は遺骨の埋葬形態とそれに基づく墓所の空間形態、いわばハード面である。

1) 有期限化の理由

このように、近代化によって出現した墓地の無縁化、流動化、個人化に対応して、この3つの現象を止め、反対に有縁化、定着化、集団化を図ったのが、近年現れてきたこれらの都市型共同墓所である。方法は、近代以前の血縁、地縁の枠の中に戻すことによる有縁化、固定化、集団化ではない。ムキ出しの個人、浮遊する個人を自らの意思による選択とその集団による縁をつくりながら、集団による共同祭祀によって、定着化を企図するものである。その仕掛けが、会や寺院の共同墓所の維持・管理システムであり、舞台装置がこれまで述べてきたさまざまな形の共同墓所である。墓所に葬られる単位を個人にすることによって、共同墓所の構築が可能になった。個人化は共同化を引き起こす前提となる。

墓地の無縁化、流動化、個人化の現象を止めるのではなく、その流れを促進させる方向が、墓地使用の有期限化によるリサイクル・システムの確立である。都市型共同墓所は有期限化による墓地のリサイクル・システムを内包していることを前項で述べた。一定期間の後には、合葬するシステムである。

墓地は「家制度」を引きずる形で、家族墓所がほとんどである。これを多様な家族形態に合わせて、個人単位とする方法である。しかし、墓所を単に個人化すれば石碑が乱立するだけで、有期限化しなければその数は増すばかりである。また、子孫の移動に合わせて、遺骨を移動させる改葬を簡易にするには、納骨堂やロッカー式納骨堂を使用しやすい管理システムを組むことが考えられる。たとえば、墓所の使用权を譲渡できるようなシステ

写真 安隠廟

このように有期限化の考え方の中には、一定期間後、墓地の継承者がいる場合は継続使用を認めていくという考え方も一考は要するが、無縁化した場合は合葬して、都市として慰霊を行っていかなければならないという。つまり、合葬＝集団化、その都市への定着化である。結局、都市型共同墓所のめざしている集団化、定着化と根を一つにすることになる。大都市の共同墓所である一心寺・骨仏、もやいの碑と類似しているが、異なる点が無縁化

遺骨（焼骨）はモノとして埋葬されるべきもの、あるいは廃棄物のどちらかとして考えられている。その遺骨を、人間の遺体の死骸としてでなく、阿弥陀如来という

矢印は遺骨の残存性の弱さ、共同祭祀性の強さ、墓地の無形化の方向を示す。

仏像に変身させたのが、一心寺の骨仏である。10年間に納められた遺骨を粉末状にくだき、布海苔を加え一体の仏像に造る。遺骨は無形化され、人間の骨としてではなく、阿弥陀如来という異質なものになる。いわば“仏化”される。

縁者や一般参詣者が祀るのは、人間の遺骨ではなく、阿弥陀如来という仏様である。仏は、先祖をはるかに超えた無名性の、時間を過去に抽象された存在である。さらに、阿弥陀如来は、無量寿、無量光を表すのだから、抽象的な無限の時空間と対峙していることになる。遺骨自体が異質化され、参詣者自体も内面が異質化される。

しかし、遺骨は、モノとしては土に帰ったり、海に流されて物質循環の中に入るわけではないので、形として残るという意味では残存性は高い。故人の名前は、一心寺の過去帳に記載されるが、銘板はなく、無名性は高い。

(2) 無形化

次に、①遺骨を土地に埋葬せず海や川などに撒いて流したり、②樹林地や芝生地のある一定の区画に撒くなど、墓地自体を無形化する方法がある。

「埋葬の自由をすすめる会」⁸⁾が平成3年(1991)に神奈川県沖の相模灘で、故人の女性の遺灰を海にまく散骨をした。これまで、「墓理法」第4条①により、墓地以外の区域に埋葬はできないとされていた。しかし、法務省も「社会的常識を越えない限り問題はない」という見解を示している。

イギリスのゴルダーズ・グリーンでは骨壺を地下埋葬するバラ園の外側にあたる芝生に撒骨される⁹⁾。

無形化によって、遺灰を撒くことにより、特定の土地の占有は少なくなる。しかし無形化により、遺骨の相続者であり、墓所の使用権者であり、墓所の維持・管理者であるという、相続者＝祭祀主宰者＝墓地の使用権者＝墓所の維持・管理者という構図が崩れてくることになる。

これまで述べてきた特徴的な墓地の埋葬空間形態を図2にまとめた。

3 考察

日本の近代化による墓地の変容と、取り残しによる矛盾の中で現れてきた墓地の流動化、無縁化、個人化の3つ課題に対応する萌芽として、都市型共同墓所が位置づけられる。その共同墓所を成立させている8つの特性は、近代化の中での理念とそれに基づく設計と維持・管理システムの取り残しを解決して、8つの特性を自ら市民が創り出して備えたところに、墓地の近代化を成立させた

と考えられる。

そして、次に、8つの特性の中でのすべての都市型共同墓所に共通する、被葬者が、①個人単位が可能、②共同祭祀がある、③死後の平等の扱い、の3点は、さらに墓地の近代化を超える要素を内包していると考えられることができる。

それは、地縁、血縁の固いつながりから、解き放たれると同時に、バラバラの個人として浮遊する人間が、個人の人生の各ライフステージでの自己決定の保障を逆照射するかたちで、人生の最終段階での死と死に続く場(空間)の自らの意思による決定を可能とするからである。

このようにみえてくると、近代化による墓地の変容とその矛盾を超える今後の墓地をめぐる3つの方向性が見えてくる。つまり、①無縁化・流動化・個人化する墓地を、墓地の共同化により、有縁化・定着化・集団化へと転換させること。次に②無縁化・流動化・個人化を前提に、それをむしろ有期限化を図ることにより、むしろ無縁化・流動化、個人化を促進させる。第3に、③撒骨により、モノとしての遺骨を自然の物質循環(生命生態系)の中に戻す、自然回帰を促進させること、である。

それには、①都市型共同墓所の構築②墓地の再利用(リサイクル)システムの確立や墓理法の改正が必要である。そして③墓地という土地を必要としない方向である。しかし、そのためには、葬送の考え方や新しい墓所の構築システム、の検討が急がれるのである。

引用・参考文献

- 1) 谷嘉代子(1982): 女ひとり生きる: ミネルヴァ書房
- 2) 女の碑の会(1988): 女の碑の会ニュースNo.10
- 3) 磯村英一(1990): もやいNo.3 3-7: もやいの会
- 4) 高口恭行(1982): 一心寺風雲覚え書: 一心寺
- 5) 藤井正雄(1982): お骨仏の研究: 一心寺風雲覚え書 288-319: 一心寺
- 6) 浜中克彦(1988): 東京都の霊園問題: 都市公園No.101 12-19: 東京都公園協会
- 7) 中島宏 室生健磨(1990): 都営霊園の将来像: 都市公園No.110 24-37: 東京都公園協会
- 8) 安田陸彦(1991): 埋葬の自由と法律: ジュリストNo.975 21-24: 有斐閣
- 9) 鯖田豊之(1990): 火葬の文化 82-138: 新潮社

Summary : The cemetery maintained by community broke down in modernization. I study new type cemetery that were constructed recent years. In consequence, I found that the cemetery have 3 important factors : the individual unit, the common religious service and the equality of after death. It seems a bud that copes with the problems in modernization.